

教会成長研究院

【第四弾】 神山威氏の講演内容の誤り、およびみ言解釈の誤り (前編)

神山威氏は、二〇一四年六月十八日、韓国・釜山で開催されたUCI(別名・郭グループ)の集会で講演をし、その後、同年九月には東京、名古屋、福岡で講演会を行い、天國經典『天聖經』の批判、真のお母様に対する批判、および後継者問題などについて、「自説」を語り、統一教会員の一体化を損ねる分裂行動をしました。その言動に対して、本部は【第一弾】【第二弾】の「神山威氏の講演内容の誤りについて」という公式見解(注・本誌に既に連載)で応答しました。

ところが、神山氏はそれらの【第一弾】【第二弾】の公式見解を無視し、同氏に同調するブログを通じて、「自説」を掲載するなどし、分裂行動を継続しました。そこで本部は、さらに【第三弾】【第四弾】の公式見解を発表して、神山氏の講演内容およびみ言解釈の誤りを指摘してきました。なお、誌面の都合上、文字数の制限があるために、より詳しくは「真の父母様宣布文サイト」(<http://trueparents.jp/>)をご覧ください。

注・本文中、神山氏側の主張は「茶色」で、真の父母様のみ言や公式見解は「青色」で色分けしています。

(一) 男性の性稟も、女性の性稟も、共に神様に由来します

アップしています。その七番目の映像の五分四十七秒から約三分間の音声文字起こせば、次のようになります。

神山氏は、福岡・久留米市で語った講演の映像をブログにア

「お父様は男だから、その染

色体DNAはXとYなんだよ。お母様はXとXだよ。二人が結ばれると、どうなるの？ 男の子が生まれたらXYの染色体を持つている。(その男の子が)お嫁さんを迎えて結婚して、男の子が生まれるとXYの染色体を持つており、女の子は、さっさみ言を読んだ中で、こんなみ言があったじゃないですか。『お母様は真の愛と真の血統を持っていません』。これは、お父様の『真の父母と重生』というみ言ですが、『真のお母様は真の愛と真の血統を持っていません。向こうのほうです』と。

これ(Y)は男から来る。男だから『父子の関係』です。だから『宇宙の根本は父子だ』という結論をお父様は出しました。(Yを)ずっとたどってみると、そこ(神様)に行っちゃうんだよ。だから、さっさみ言を読んだ中で、こんなみ言があったじゃないですか。『お母様は真の愛と真の血統を持っていません』。これは、お父様の『真の父母と重生』というみ言ですが、『真のお母様は真の愛と真の血統を持っていません。向こうのほうです』と。

神山氏は、女性は神の血統を持っていないかのように主張しています。これは、女性蔑視とも言いうる珍論です。

『原理講論』に、「神は陽性と陰性の二性性相の中和的主体(四六ページ)とあるように、男性の性稟も、女性の性稟も、共に神様に由来しています。神山氏は、男性が持つYの性染色体は神様に由来し、Xの性染色体はそうでないかのように論じますが、その主張は女性差別であり、原理的にも誤りです。

は持たないために、女性は父親の遺伝子を受け継いでいないかのように、勘違いをする人も、まれにいます。男性だけが父親の血統を受け継いでいるかのように述べる神山氏の言説は、遺伝に関する無知が生み出した、非科学的珍論です。

神山氏は、男性だけが持つ性染色体Yを持ち出すことで、まるで男の子女様だけが真のお父様の遺伝子を相続しており、女の子女様は相続していないかのように論じます。しかしながら、性染色体は、人間が持つ染色体二十三対の内的一对にすぎません。Yの性染色体以外の父親の遺伝子は、女の子にも受け継がれているのです。

神山氏は、とんでもない勘違いから、神様の中に、女性の性稟があることを忘れて、Yの性染色体だけが神様に由来し、だからこそ、真のお父様は「宇宙の根本は父子だ」と語られたのだと主張します。しかし【第二弾】の公式見解で反論したように、「ここで明確にしておかなければならないのは、父子関係とは『父と息子』の関係に限らず、『父と娘』の関係も父子関係であるという点です。……神様は『本陽性(男性)』としてのみおられるのではなく、『本陰性(女性)』でもあられます。神様には、女性の性稟がないのではなく、ある」という点

ゆえに、女の子女様も、真のお父様の遺伝子を受け継いでおられます。性決定する男性のY染色体のみに着目すれば、当然、男性しかY染色体

「生命を見ましたか？ ……生命体は見えるけど、生命は分かりません。……血統もそうです。血統は夫婦が愛するその密室、奥の部屋で結ばれるのです。そして、精子と卵子が出合って生命体として結合するとき、血統が連結されるのです」(『ファミリー』一九九五年三月号、二二ページ)

さらに、真のお父様は、血統と遺伝法則について、次のように述べておられます。

「千代万代後孫が罪人になる善悪の果とは何でしょうか。これは血統的關係です。血統的に罪の根を植えておけば、遺伝の法則によって永遠に続くのです。そうであり得るのは愛の間

このように、「血統」と生理学的な「遺伝法則」は一体不可分です。血統について、公式見解の【第三弾】の反論でも述べたように、「血統の連結には、当然のことながら、男性(精子)だけでなく、そこに女性(卵子)も関与していることについて、(真のお父様は)明確に言及しておられます」。

そして、真のお父様が「エデンの園のアダムは、神様の独り娘です。エバは、神様の独り娘です」(『文鮮明先生御言選集』一五九卷一九五ページ)と語っておられるように、「本然のエバ(女性)は神様の『独り娘』であり、神様の血統を持っているということを知らなければなりません」。

持っている、持っているのではなく、持っている、持っている。

(2) 悪意あるみ言の引用・お母様は真の愛と真の血統を持つていません」

神山氏は、男の子女様の、真のお父様の遺伝子を受け継ぎ、女の子女様はそうではないかのように論を展開する中で、み言のある一部分だけを引用して、「お母様は真の愛と真の血統を持つていません」と主張します。これは悪意に満ちたみ言の引用であると言わざるをえません。神山氏が引用したみ言の前後を讀むと、次のようになっています。(注・神山氏の引用部分は太字ゴシックで表記)

「過って生まれたのだから、蕩滅は反対の方向へ行くのです。生まれるのも反対の方向にこういうふうに進んできたので……『逆に帰れーっ!』と。そういう

うふうに再び生んだものが、地上天国です。分かりましたか？(はい)。そういうふうにして、真の母の腹を通過して再び生まれてくるのです。

これに、入ってくる時は左のほうから入ってくるのです。分かりましたか？なぜ左のほうから入るかという、お母様が左のほうだからです。入ってきたお母様の腹の中に入ったとしても、その入った子供とお母様の根っこは何かという、渋柿の根っこから切って取り返してきたものです。分かりますか？それが天の家庭に入るには、手続きをしないとけないのです。何の手続きかという、愛の手続きです。だから、真のお母様の腹の中に入っても、それは真のお父様の真の愛と真の血統にはまだつながっていないのです。お母様は真の愛と真の血統を持つていません。向こうのほうなのです。それは、新婦の立場で、新郎を迎えて一つとな

るということです。分かりましたか？ 分かりましたか？(はい)。

全世界がここに入ってきて、それからどうなるかという、真の父母の夫婦関係によって、はらんだ子供、その者を、真のお父様の真の愛を中心に、真の子供の種を持ったお父様が愛の関係を結ぶことを、実感したあとに生まれたと同じようになるのです。そのような期間を通過しながら、お母様の腹の中に入った子供たちが、真の父の子供の種が真つ赤だったとするならば、愛の関係を繰り返すことによって、色が染められていくのです。ピンクからだんだん深まって、ピンクからだんだん深まっていくのです。ピンクからでもそうなったとすれば、真の父母の愛と真の子供の種と接ぎ木したという、つないだということになるのです。……分かりましたか？ そういうふうの一つとなった状況をもって、それは一つとこれを回って、母の腹の

中を通して、先生の体を通して、再びお母様の腹を通していくのです。右のほうを通してです。

……再び生むことになるのだから、サタンの血統とは全然関係がないのです。別個の天的本来の真の父母から出発した子女の立場に立つのだから、天上、地上天国に、お母様と真の父母によって、入ることができるのです」(『訪韓修練会御言集』一八五～一八六ページ、注・サイドラインは筆者による)

サイドラインを引いた部分で、真のお父様が「愛の手続き」、「新婦の立場で、新郎を迎えて一つとなる」、「真の父母の夫婦関係によって、はらんだ子供……愛の関係を結ぶことを、実感したあとに生まれたと同じようになる」、「母の腹の中を通して、先生の体を通して、再びお母様の腹を通していく」、それゆえ、お父様は、祝福家庭は「サタンの血統とは全然関係が

ない」と語っておられるのです。

すなわち、真のお父様と「新婦の立場で、新郎を迎えて一つ」となられた真のお母様は、サタンの血統とは全然関係がなく、根が違っているのであり、神様の「独り娘」であられ、神の血統を持つておられます。私たちは、その真の母の腹を通過して、父の骨髄の種の位置まで遡行し、再び母の腹を通じて生まれなければなりません。この内容は、次のみ言と同じ主旨のもので

「完成したアダムの体中の種の立場に帰っていくのです。……我々はみんな、墮落しない人間である父親から出発しなければならぬということ。つまり、墮落しない独身のアダムの体から出発した種が、母親の胎内に身ごもられなければならないのです。……既に肉身をもって生まれ、成長してしまつた我々は、文字どおりに、完成したアダムの体中の種の立場に

返ることはできません。

ですから、我々は、真の父母および、その父母から生まれた真の子女と一体化することによって、再び生まれるための条件を立てていくのです。カインとして、完全にアベルに屈服することによって、両者共に復讐されるという原理があるので、この原理により、我々カインの立場にある者は、アベルである真の父母、真の罪なき子女と一体化しなければならぬのです。彼らと一体化することにより、我々は復讐された子女として、同じ恵みを受けることができるのです。

それゆえに、真の罪なき子女が、真の父母を通して生まれる時、我々は、食物やその他、同じ成分のものを分かち受けるための条件を立てなければならぬのです。……誰を通じて真の子女と一体化し、新たに生まれた子女となる条件を立てるのであるか？ 父親だけでは十分で

はありません。真の父母を通じてなければなりません」(『祝福家庭と理想天国(II)』一四〇～一四一ページ、注・サイドラインは筆者による)

このように、生まれ変わる(重生)ためには、父だけでは十分ではなく、その父と「新婦の立場で、新郎を迎えて一つ」となられた「真の母の胎」を通じてなければなりません。

だからこそ、真のお父様は「母の腹の中を通して、先生の体を通して、再びお母様の腹を通していくのです。……再び生むことになるのだから、サタンの血統とは全然関係がない」と語っておられるのです。

ところが、神山氏は、「この血統転換は、真のオリーブの木である真のお父様(男性)によってのみなされます」(神山氏「公開質問状4」と述べ、真の母を排除します。『原理講論』には、「父は一人

でどうして子女を生むことができるだろうか。墮落した子女を、善の子女として、新たに生み直してくださるためには、真の父と共に、真の母がいなければならぬ」(二六四～二六五ページ)と明記されています。

血統転換するには、真のお父様(男性)だけでなく、真のお母様がいなければならぬというの、血統転換を論じるとき、基本中の基本です。それを、「血統転換は……真のお父様(男性)によってのみなされます」と神山氏が述べていることに対し、驚きを禁じえません。

神山氏の「お母様は真の愛と真の血統を持つていません」というみ言の引用は、悪意に満ちた引用の仕方であり、真の母を通じてなければ重生(血統転換)できないという、重要ポイント、を理解しておらず、かつ、重生の全体像を見ていない、普通ではありえない引用です。